

基盤共同研究 ポルト南蛮屏風の 総合的研究による新領域の開拓

期間：2021年7月9日～2024年3月31日（科研費 挑戦的研究〔開拓〕）

〔所員〕 関口博巨 久留島典子 昆 政明 角南聡一郎 泉水英計 吉澤達也

〔客員研究員〕 岡美穂子 森脇優紀

ポルト南蛮屏風の総合的研究による新領域の開拓の概要

関口 博巨

研究の目的

本研究は、エヴォラ屏風文書（レプリカ、本学所蔵）ならびにポルト南蛮屏風下張り文書（ポルトガル・ポルト市、ソアレス・ドス・レイス国立博物館所蔵）に関する総合的・資料学的研究を目的としている。

エヴォラ屏風文書（レプリカ）は、20世紀初頭にポルトガルのエヴォラで発見された屏風下張り文書であり、豊臣秀吉側近の安威氏関係文書、キリスト教布教関係の記録など、1600年前後の史料群である。

ポルト南蛮屏風下張り文書は、京都の菓子屋「菱屋」が所蔵していた近世中期の古文書（約2,000枚）である。その屏風絵は狩野派の絵師が描いた17世紀のものと推測される作品で、近世初期の風俗資料としても価値が高い。下張り文書は、2002年の屏風修復の際に取り外されたものである。

本研究では、これらポルトガル伝来屏風文書のデジタルデータ化と目録の整備をすすめる。将来的には、他の在外下張り文書も視野に入れて、歴史学・民具学・美術史学・キリスト教史学・情報学・建築史学・文化人類学などの学知や古文書修復などの経験知を総合した国際的・学際的な研究に発展させることを期している。

これまでの経過と今後の展望

2019年度末の2020年1月末、所員の関口博巨と泉水英計がソアレス・ドス・レイス国立博物館を訪ね、修復された南蛮屏風とその下張り文書の予備調査を行った。これを受けて、2020年度には個別共同研究「ポルト屏風下張り文書等の予備的研究」



写真1 下張り文書の予備調査（2020年1月）

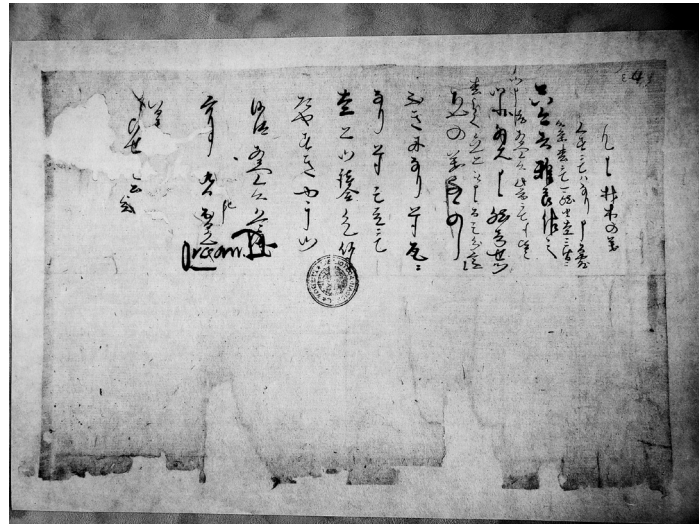


写真2 エヴォラ屏風文書 レプリカ (1)

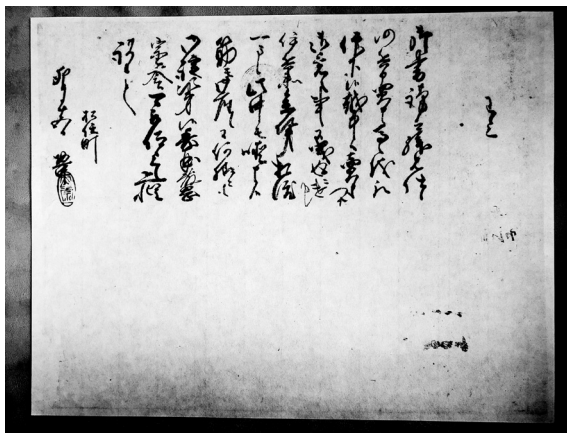


写真3 エヴォラ屏風文書 レプリカ (2)



写真4 エヴォラ屏風文書 (レプリカ) の収納箱 (一部)

を立ち上げた。

2020年度には、エヴォラ屏風文書レプリカ（岡墨光堂製）が、南蛮屏風下張り文書修復実行委員会から神奈川大学へ譲渡されることが決まった。これを機に、2021年度からは、本研究の位置付けを個別共同研究から基盤共同研究に改め、共同研究の名称も「ポルト南蛮屏風の総合的研究による新領域の開拓」に変更した。

あわせて、「ポルト南蛮屏風の総合的研究による新領域の開拓」は、2021～2023（令和3～5）年度の科研費挑戦的研究（開拓）に採択されたため、2021年度からは常民研の所員のほか、研究分担者をお引き受けいただいた他機関の研究者には、本研究所の客員研究員に就任していただいた。こうして本プロジェクトは、新体制で調査・研究を進めてゆくこととなった。

しかしながら、世界的なコロナ禍のなか船出した本プロジェクトは、研究活動を大幅に制限され、昨年度に引き続き今年度も調査活動ができなかった。

※ 2021年に個別共同研究「ポルト屏風下張り文書等の予備的研究」から、研究カテゴリ・研究名を基盤共同研究「ポルト・エヴォラ屏風文書の総合的研究による新領域の開拓」に変更。2021年7月9日より、科研費 挑戦的研究（開拓）「ポルト南蛮屏風の総合的研究による新領域の開拓」

※本研究はJSPS 科研費 21K18119 の助成を受けたものです（2021年7月9日～2024年3月31日）